

アイロニカル秘封トーク

Iteration:6

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秘封倶楽部の二人が語る、他愛ない雑談的一幕。

T a l k	T a l k	T a l k	T a l k	T a l k	T a l k
6	5	4	3	2	1
34	28	22	16	7	1

目

次

Talk 1

「待たせてごめんねメリー。此処が私のお気に入りのお喫茶店よ」

「へえ、小洒落たカフェね。まさかウチの大学の近くにこんな店があつたなんて」

蓮子は驚いているメリーを見て得意げに胸を張った。蓮子が案内した名も無き喫茶店の奥まった窓際の席は、彼女だけの密やかなお気に入り場所だった。

「ここなら近くに他の客も来ないし、景色も良いし、おしゃべりをするにはぴったりの場所でしょう」

席に着いたメリーはメニューを見て眉を顰め、小声で呟く。

「珈琲一杯で五百円だなんてちよつと高級志向過ぎるわ。私たち貧乏学生には場違いな店じゃないかしら？」

「ふふふ、その値段には場所代も含まれているのよ。私とメリーとで好きな飲み物を一杯ずつ注文しましょう。それでこの席は私たちのものよ」

「ふーん、そんなものなのね」

自動販売機の缶コーヒーにすら懐を痛めるメリーは、この喫茶店が物ではなく場所を売る商売をしているのだと蓮子に説かれて納得したようだった。彼女達は各々好みの

飲み物に口を付けつつ、他愛もない雑談話に花を咲かせる。この物語は、そんな二人の語り的一幕の継ぎ接ぎである。

く四方四季く

「四季があるのは日本だけだっていう古典的な言い回しがあつたわよね。それがどうにも気に入らないわ」

「あら、急にどうしたの蓮子？」

「春めいてきて季節が身近に感じられるから気になったのよ」

「ふーん。で、どうしてその言い回しに気にかかるの？」

「だって、気候っていうのは大雑把に言えば緯度や経度に紐づけられた領域のことでしょう？ 四季が日本にしか無いなんて大嘘吐きも良いところよ。日本と同じぐらいの緯度なら、日本と同じような四季があるはずなのよ」

そういつて蓮子は卓上に載せた携帯端末から地球儀のホログラムを投影した。日本とおよそ同緯度の領域が強調表示されている。

「四季は地球にへばりついていて。帯のようね」

「そんなに単純な話では無いでしょう。地形や風向きの影響だって受けるでしょうし、

標高だつて関係するわ」

「まあ、確かにそうだけど……」

メリーは携帯端末の音声認識機能を有効にして言葉を放つ。

「ケツペンの気候区分における温暖湿润気候区を表示してちょうだい。ほら、四季は地球にへばりついているけれど、私には帯のようには見えないわよ」

「手厳しいね。流星はメリー」

表示された分布図では、東アジアから南アフリカまで様々な地域が示されている。そして確かに、带状ではなく飛び飛びだ。

「ええと、ケツペンの気候区分は植生を元にして気温と降水量で気候区分を定めていたはずだから、その気候の成因までは分からないはず。それに気候学的に見るならばそうかもしれないけれど、天文学的に見れば太陽高度の差異から四季は定義されるはずよ」

「それでも蓮子の言い分を否定するには——否定できないわね。確かに日本と同じように四季の変化が明瞭な気候区分は地球上に点在しているわ」

「帯状でないのはそうでございますからお許しくださいメリー様」

「ふむ、許す」

畏まつて芝居がかった素振りや頭を下げた蓮子を、メリーはこれまた劇的に許した。ともあれ、蓮子の主張の本筋にはメリーも頷いている。

「で、やっぱり四季は日本以外にもあるでしょ。なのに四季があるのは日本だけなんて言い回しは欺瞞よ」

「それはそうだけど……それはあんまりにも風情がない断じ方よ蓮子」

「風情？」

首を傾げる蓮子に溜息を吐きながらメリーは諭す。

「確かに四季と呼べる気候は日本以外にも存在する。でも、春に桜を見てお酒を呑んだり、夏に氷水で冷やした西瓜を食べたり、秋に紅葉した山を物見遊山したり、冬に炬燵に入って蜜柑の皮を剥く。そうした四季の過ごし方があるのは日本だけでしよう？」

「ああ、成る程。あの古典的言い回しは四季という気候ではなく文化について言及していたのね。それなら納得だわ」

蓮子は晴れやかな表情で頷く。

「しかし複雑ね。四季という言葉一つに、文化的な四季、天文学的な四季、気候学的な四季といった複数の意味合いが纏められていて、それを混同してしまうから今回みたいな疑問が生じるのね。日本の文化的な四季は日本にしかない、そう言ってくれば誰も異議は唱えないでしょうに」

「そんな厳格な言葉遣いを要求されてしまったては堅苦しくて堪らないわよ。蓮子とこうして話し合えているような曖昧とした言葉が私は好きね」

メリーは肩を竦めて見せる。

「あ、でももう一つあるわよ」

蓮子は思いついたように語る。

「暦の上での四季、とか。まあ、これについてはあまり興味無いけどね。だから今まで忘れてた訳だし」

「あら、どうして興味が無いの？ 暦は古来から天体との関係が深いわよ。太陽、月、そして星々。人々は変わらぬ天上の運行の循環から地上の暦を得たのよ」

「それは昔の話よメリー」

悲しい目をした蓮子は、物憂げに俯きながら言葉を漏らす。

「暦は常に権威によって捻じ曲がる。私は世界がどう在るかについて尽きない興味を抱くけれど、人間が定めるものにはさっぱり興味が無いわ」

「蓮子ったら、そんなだから私との待ち合わせに遅れるのよ。ちよつとは人間が定めた時間に従ってくれないかしら」

「それは……ごめんなさい」

「ふむ、許す」

「やった、許された！」

「喜ばないで、これでも結構怒ってたのよ」

頬を膨らませたメリーを前にして蓮子は縮こまる。

「ええと、このエクレアなんてどうかしら？ ほら、私が奢るから」

メニューを手にメリーの機嫌を直そうと四苦八苦する蓮子を見て彼女は微笑んだ。

「ふふ、蓮子のそういう即物的な所、私は好きよ」

「それって、どっちの意味で？」

「ど、どっちって……それは……」

蓮子の唐突な問いに言い淀むメリーに、蓮子は事もなげに言葉が続ける。

「主観を排してこの世の物に対して真摯である科学者然とした姿勢という意味なのか、それとも金銭的な事を優先して考えることなのかと思つてね。ほら、四季という言葉一つとっても沢山の意味がある事が分かったから、今回は厳格にメリーの言葉を受け止めてみようと思つて」

「……はあ。分かったわ蓮子。そのエクレアと、あとはこのプリンで許してあげる」

メリーは甘いプリンを口に運びながら溜息を吐いた。蓮子は賢いしカッコいいし優しいけど、人の心の機微には少し疎い。それは良くもあるけど、悪しくもある。できるならば厳格に、言葉ではなく心を受け止めて欲しいな、なんて。

そんな風に思いながらメリーは、不思議がつている蓮子の目をじつと眺めたのだつた。

Talk 2

雨が降り頻る中、秘封倶楽部の二人は窓際の席から景色を眺めていた。蓮子は物憂げな表情だ。

「うう……ちよつと寝不足なの。例の教授のレポート課題のせいで酷い目にあつたわ」

「へえ、どんな課題だったの？」

「量子色力学の発展とハドロンの弦理論の失敗についての歴史的な考察よ。どちらかといえば科学史の領分だったわ」

「ふむ、詳しくは聞かないでおきましょう」

「うん、そうして頂戴。1970年代の資料を探し回るハメになったわ。これじゃあ科学者なのか歴史学者なのか分かりやしない。私たちは大学に最新の科学を学びに来たのに、あの教授は電子化もされていない埃を被った論文をスカベンジャーみたいに漁つてる。きつと変人なのよ」

寝不足から口が悪くなっている蓮子の言葉を聞いて、メリーはジト目で彼女を見つめる。

「貴方が人を罵るなんてらしくないわ。これは中々に深刻な睡眠不足ね」

くブラック・ブラックく

「兎も角今日は雨の日ね。雨といえば、黒い——雨かしらね」

「ええ……」

メリーは困惑と同時に心配した。蓮子は目の下に深い隈を作っており、視線も覚束ない。彼女はブラックコーヒーを頼もうとしたが、メリーは慌ててその注文を遮った。

「ダメよ蓮子。すみません、ホットミルクとレモンティーをお願いします」

「メリー、目覚ましが欲しいの」

「貴方に必要なのはカフェインではなく睡眠よ」

困り顔をした蓮子は不健康そうな瞳でメリーを見つめる。しかし、溜息を吐いて彼女は諦めた。

「分かったわ。ホットミルクで。さて、黒い雨といえば核兵器が使用された際に確認された天気だったわよね」

「何故急にそんな暗い話を……。確か、発生の原理は単純なものだった筈よ。核爆発で発生した熱による上昇気流で舞い上げられた大量の粉塵を、雨粒が取り込んで黒くなったものでしょ？」

蓮子は頷いて言う。

「そうそう、それぞれ。原理としては酸性雨なんかと同じで、雨粒が大気中の物質を吸着した結果に過ぎない。雨上がりに空気が澄んでいるように感じるのは、気のせいではなかったという訳よ」

「酸性雨？」

「ほら、化石燃料の燃焼で生じた二酸化硫黄や窒素酸化物が化学変化を起こして硫酸や硝酸となって雨に溶け込むアレよ」

「旧時代の環境問題の一つね。懐かしいわ」

旧時代。それは先進各国が少子高齢化や環境問題に悩まされていた最後の時代。人類はその数を大きく減らし、化石燃料への依存から脱却することで持続可能で豊かな社会を構築した。計り知れない痛みと犠牲を伴う転換であったが、それを知る者は今や数少ない。

「降ってくる雨が酸性になるなんて信じられない話よね。一体どれほど深刻な大気汚染が存在したのか想像すらできないわ」

「私もそう思うわ。まあ、あの時代の人類は化石燃料を燃やす事でしか社会を維持できなかったらしいから。そんな事すれば生態系上の炭素量は増す一方になる事に誰も気付かなかったのかしら？」

動物も植物も有機物であり、その体の一部に炭素を持つ。呼気と吸気も光合成も全ては循環の一部であり、生態系上の炭素量の総量はほぼ一定だ。人類が炭素の塊を太古の地層から掘り出し始めるまでは。

「二期は再生可能エネルギーとやらが流行っていたこともあつたらしいけれど……」
「欺瞞よねえ。再生可能だなんて大嘘も良いとこだわ」

化石燃料でなく、永続的な利用が可能なエネルギーを求めて人類は多くの資源に手を付けた。だが結果は散々だった。

「だって化石燃料だって再生可能でしょ。今ある化石燃料の成り立ちと同じ過程をもう一度経れば化石燃料は再生するもの」

「百万年ぐらいかかるわね」

「でも再生するわよ?」

「わたし、蓮子のこういう皮肉屋なところ好きじゃないわ」

ニヤニヤしている蓮子。メリーは呆れ顔だ。

「人類が利用可能な期間で再生可能なエネルギー源という意味よ」

「承知致しましたメリー様。ではこちらの風力はいかがでしょう?」

「ふむ、話せ」

芝居がかった様子で蓮子は語り始める。

「こちらは風の力で電気を作る仕組みでございませう」

「素晴らしいわ。では化石燃料の使用をやめて人類は風力発電で電力を賄うことにしましょう」

「お待ちくださいメリー様。風は摩擦を受けて減衰する有限の力でございませう。化石燃料による発電量を賄えるだけの風力発電機を乱立すれば地表の風は著しく弱まります。いったいどれだけ甚大な地球環境への影響を与えるか想像もつきませぬ。風力は地球上の力学的なエネルギーの循環の一部であり、そこからエネルギーを搾取することは多くの影響を齎すのです」

「ふむ、やっぱりやめるわ」

蓮子は更に笑顔を深くする。目の下の深い隈も合わさってまるで悪い魔女のようだ。

「ではこちらは水の力で電気を作る仕組みでございませう。ただ、水の流れも摩擦を受けて減衰する有限の力でありまして、化石燃料による発電量を賄えるだけの水力発電を行うと、海流に対する影響は甚大でありますし、世界中にダムを建造する為に山という山を片っ端から切り拓き、川という川を堰き止めねばなりません」

「ふむ、ふむ、おぼえてるの？」

「いやいやメリー様、至って真剣真摯なお話でございますよ」

メリーはしかし、蓮子の言わんとする事を理解した。

「つまり、人類が利用しているだけのエネルギーを地球環境の中から取り出そうという時点でもはや詰みだったのね。これだけ莫大なエネルギーを取り出そうとすれば、どのような手法を取ろうと深刻な影響と変化を齎すことになったと」

「その通りよメリー」

蓮子は頷き肯定する。

「例外は地球の外側からやってくるか、地球上で誰にも利用されていないエネルギーだけよ。つまり太陽光と、人類以外は利用しない原子力による発電ね。ただ、太陽光は植物が既に利用しているエネルギーよ。太陽光電池を設置する為に山を切り開きましようか？ あと、原子力は当時の世論や使用済み燃料の処理についての問題があったそうよ。大っぴらに原子力発電を推進するには解決すべき難題が山積みだった」

「手詰まりねえ」

メリーは匙を投げた。

「化石燃料に依存しなければ成り立たないエネルギー事情。しかし、化石燃料を使用すれば地球環境は激変し人類は深刻な出血を強いられる。使わねばダメ、使ってもダメ。まるで麻薬か何かだわ」

だが、メリーは気付いた。

「ねえ、蓮子。この問題って——人間が減れば解決するんじゃない？　だって人類が利用しているエネルギーが莫大なのが問題なのだから、もっと人間が減って使用するエネルギー量が減れば全て解決するわよね？」

蓮子の笑みは最高潮に達した。メリーは悍ましいものを感じて身を引く。

「その通りよ」

寝不足の細目の瞳が、メリーを射抜く。

「人類はその数を大きく減らして持続可能で豊かな社会を構築したわ。でも環境問題の根本的な解決はできなかった。いずれまた人類はその数を増し大量生産と大量消費の時代を経て同じ問題に直面するでしょうね」

「その為の寿命統制でしょ？　個体数の管理こそが肝要なのだと」

「悪いけれど上手くいくとは思えないわね。私は人類が同じ過ちを繰り返す方に賭けるわ。だって歴史がそれを示しているから。まあ、お先真つ暗なわけではないわよ。またインシュタインみたいな天才が夢のようなエネルギーを見つけるかもしれない。彼が物体とエネルギーが可換であることを示したのは一種の革命だった」

メリーは呆れ果てた様子だ。

「そんな夢物語に縋らなければならぬなんて馬鹿げてるわ」

「そうね。こんな馬鹿げた暗い話はやめにしましょう。人類の個体数が増えて環境問題がまた現れるのは少なくともあと数世紀は未来の話よ。さあ、未来の問題は未来の子孫に任せて私たちは豊かな社会を謳歌しましょう」

蓮子は乾杯するような仕草をしてからホットミルクに口を付けてウトウトとし、そのまま眠りについた。

「知りがりで、物知りで、皮肉屋で、そしてその知見を限られた相手にしか明かささない。貴女は正に前時代的な科学者の鑑だわ」

机に突っ伏している蓮子の頬をつついてメリーは微笑む。

「おやすみなさい、蓮子」

メリーは蓮子の穏やかな寝息を耳にしながら、物静かにレモンティーに口を付けた。雨音がシトシトとしているが、雨雲の切れ目からは天使の階梯が伸びている。二人の座る席にも光が差し込む。

彼女は廃墟と化した旧首都の東京を思い出していた。日本の東海道メガロポリスも

今や伽藍堂だ。かつてに比べれば人々は数少なく、そして豊かだ。だが何故か僅かばかりの物悲しさがメリーの胸にあつた。

寂れた都市、手入れのされていない里山、放棄された社会インフラ、そして秋になれば至る所に繁茂する彼岸花。メリーは人類が成功したとはとても思えなかつた。

「まるで夢の跡に残つた墓場か何かね」

存在しない人々の都会の喧騒をメリーは雨音の中から聞き取つた。

Talk 3

「暑いわねえ」

メリーは晴天を見上げながら気だるげに言う。蝉が鳴いてはいないが、その日は焼けるような真夏日だった。

「でも店内は空調が効いていて快適よ。文明の利器は偉大だわ」

蓮子は店員に注文を伝えて冷えたテーブルに突っ伏した。店内は人為的に管理された空間であり、人間にとって快適な環境に保たれている。また、飲食物を取り扱っていることもあり、あらゆる備品は潔癖とも言えるほど清潔そのものだ。

「ドアひとつ隔てただけでこんな環境が変わるなんて、なんだか不自然な感じね」

「それは当然よメリー。人為的に管理されたこの空間はあるがままの自然とは正に対極に位置しているのだから」

↳ Artificial・Nature

「自然と不自然の境界って何処にあるのかしらね？」

蓮子はメリーに問いかけた。

「自然な風景を思い描くとある程度の類型があるでしょ。例えば赤トンボの飛んでいる田畑だったり、清らかな小川だったりね」

「そうね。実に自然で牧歌的な風景だと思うわ」

「でも田畑は人間が農業の為に手を加えた不自然の塊のような土地よ。河川だって治水の歴史を鑑みれば自然との戦場の最前線でしょ？」

鋭い言葉にメリーは考え込んでしまう。

「うーん、程度の問題だと思うわ。確かに蓮子の言う通り、田畑は農業の為の人工的な管理された土地よ。でもそれは都会の無機質な交通路よりも遥かに自然的ではないかしらっ？」

「自然的！ 自然的ってなーに？」

蓮子は微笑みながら問う。メリーは困り顔だ。

「あんまり意地悪しないで頂戴」

「意地悪？ まさか、私はただの知りたがりよメリー」

「植物の占める床面積の度合い、とか？」

「それだと人間が人為的に植林した里山は人の手が加わっていないツンドラよりも自然的になるわね」

メリーは暫く沈黙した。その間に、二人が注文したアイスティーがテーブルに届いた。彼女は茶に口をつけて、リラックスして椅子に深く腰掛ける。

「降参よ蓮子。私には分からないわ。貴方には分かる？」

「元はと言えば私の疑問だったからね。少し考えてみる」

蓮子がプランク並と自称し、メリーからはこの世界の仕掛けが全てみえていとまで称されるその頭脳を持ってして、彼女は匙を投げた。

「ごめんなさい。私にも分かんないわ。だって人間が決めた事だもの。決めた人間に聞きに行かないとどんな天才にだって分からないわよ」

「ま、それもそうね」

「でも私が思う自然と不自然の境界は——」

蓮子は自信たっぷり胸を張って言う。

「直線よ！」

メリーは首を傾げたが、蓮子は構わず早口で言葉を続けた。

「自然には直線がないのよ。まあ、全く無いとは言わないけれどほぼない。でも、人間が

手を加えているものはあら不思議、ほとんど全て幾何学的な直線がある。田畑も堤防も交通路も何もかも直線よ」

「確かに言われてみるとそうかもしれないわね」

「厳密な直線は自然界には存在しない……そんな風に私は思っているわ」

「あ、雪の結晶とかはどうかしら？」

「あ……それは例外ってことで」

蓮子は窓の外の空を指差した。

「ほら見てメリー。綺麗でしょ？　空には直線がない。だから私たちは空を見上げると救われた感じがするのよ。どんなに無機質で幾何学的な直線に溢れた不自然な世界に囲まれていても、見上げればそこには自然がある。それはそれは素敵な話だと思わないかしら？」

「そうね、とても素敵な考え方だと思う」

目を輝かせて空を見つめる蓮子に、メリーは目を奪われた。その憧れを含んだ情熱的な眼差しが、メリーを見惚れさせたのだ。

「ただ、これは私がそう思っているというだけのことよ。言わば信仰のようなものとも言えるわ。例えば昔はビー玉とかあったでしょ？」

「大昔の炭酸飲料の栓として使われていたガラス玉のことね。民俗学のデータベースで

目にした事があるわ」

「そうそれ。人工的な——球体よ。つまり、不自然に自然な不自然よ」

「ごめんなさい、ちよつと何を言っているか分からないわ」

ややこしい言い回しに疑問符を浮かべるメリー。しかし、蓮子は話の核心部を語り始めた。

「この話の一番面白いところはね、何が自然かを定める事ができればつまり、自然は人工的に作る事ができるということところなのよ」

「人工的な自然……」

「そして日本ではそれは遙か太古から認知されていたのでしようね。例えば庭園では枯山水なんかを見て貰えばわかるけれど、あれは直線のない自然を人工的に再現する試みの一つなのではないだろうかと私は思っている」

「自然を人工的に再現する試み？」

「人類が誕生してから約500万年の時が流れたけれど、文明と呼べるもの——古代メソポタミア文明とか——が現れたのは5000年前ぐらいからでしょ？ そうだとすると、人類が文明と共に生きた時間は、その誕生から現在までのたった0.001%にしか過ぎない」

蓮子は両手を広げて周囲を示した。

「ほら、世界には直線が多すぎる。人は自然を、これまで99・999%の時を過ごしてきた直線無き世界を求めているように私には思えてならないわ」

そして、芝居らしく劇的に語るのであった。

「即ち人は、空を見上げたくなる生き物になったという訳よ」

「それは蓮子の個人的な嗜好でしょ？」

「……流石はメリー。私のことがよく分かっているのね」

「それほどでも」

暑い日差しでの照りつける夏日。それでも涼しく快適な店内から、蓮子は帽子をずらして空を見上げ、自然と不自然の境界を幻視する。

青い、青い空に、真っ直ぐに引かれた飛行機雲を。

T a l k 4

「私が思うに、私たちのサークル活動に足りないものは一つ。資金よ」

蓮子の言葉を聞いてメリーは気怠げに目を細める。

「俗物的ねえ。無いもの強請りをしたって仕方がないわよ」

「それはそうだけど、こうやってメリーとお喋りができるのは珈琲を二つ頼めるだけの支払い能力があるからよ」

「ならその調子で、私たちに無いものではなく有るものを挙げていきましょう」

頭を指差しながら蓮子は語る。

「私たちにあるもの……それはこれよ。c o g i t o , e r g o s u m」

くオートマタく

「有名なデカルトの言葉ね」

「物質に対する彼の独創的な考え方は特筆に値するわ」

蓮子の言葉に対して、相対性精神学を専攻するメリーは首を傾げた。

「デカルトと言えば心身二元論でしょ？　今となつては古錆びた理論だし、蓮子が注目するようなものとは思わなかつたわ」

「彼は科学が扱う対象を物質に限定した科学者の一人だった。世界は精神と物質で構築されているが、科学は物質を対象とする。素晴らしくスマートな宣言よ。実に独創的で美しい」

「なんだか喧嘩を売られている気がするわ。精神学は科学ではないとでも言うつもり？」

「流石にそこまで私の心は狭量じゃないよ。但し、科学とそれ以外を股にかける境界的な場所だと思つているのは否定できないかな」

蓮子は正直に自分の意見を表明した。結果としてメリーは反駁する。

「デカルトは、思考しない物質を対象とする事で万物を物理的な視点から解釈したわ。人間の事は分からない。でも人間の腕ならば？　腕の骨ならば？　骨の組成ならば？　そう、分かることができる。精神をよ所に置けば、人間という物質は理解可能である」と

「うん、素晴らしい考え方よね？」

「いいえ、彼の言によれば魂を持たない——即ち思考しない物体は——皆、複雑なオートマタに過ぎないのよ。木や花や鳥や蟻は、複雑な仕組みを持った機械であり物体に過ぎ

ないのだと」

メリーは少し不機嫌なようだ。早口で言葉が連なっていく。

「確かに今と環境が違う当時としては自然な考え方だけれど、人間のようには思考する存在以外は魂無き機械に過ぎないというのは、今の私達からすると直感的には受け入れ難いのよね」

「その点についてはデカルトだつて承知していたと思う。人間と同程度の知的能力を持つ動物は当時だつて知られていたし、精神と物質の肝心の繋がりにしても難点だったからね。でも、遺伝子の発見がその違和感を払拭した」

「生物というオートマタのアルゴリズム、それは今や私たちの目に見える形としてあると言いたいよね」

「うん。メリーには悪いけど、私には生物が有機的なロボットに思えてならない。蟻や蜂は、みな定められた行いを繰り返すロボット。花も木も、延々と繰り返す動作している。まあ、このプログラムは急に編集されたり試行錯誤を伴うアルゴリズムを有したりするけれど」

一拍おいて、蓮子は表現する。

「アルゴリズムの複雑さが魂に見えているだけなのかもしれない。私から言わせれば、単純なものこそ何より美しいのだけれど」

蓮子はメリーの意見に同意しつつも、自分の意見を曲げることはなかった。

「ともあれ私がデカルトを尊敬している最大の点は、彼が精神と物質を二つの世界に別けたことで科学にとつてどれだけ物質界が重要であるかを明確に示したことよ。今もそれは変わらない。人間を治そうとする医者が人間の精神ではなく、まずは物質としての人間を理解するところから始めるのも正にそうなのだと思わない？」

「蓮子の意見は分かったわ。そして私もそう思う。故にそうして科学が手を付けずに祀り捨ててきた精神界を、一端の科学者の卵として私は探検している訳ね。これまで科学の主流は精神界をよそにおいてきた。結果として今やそこは科学の最後のフロンティアの一つになっている」

メリーも自分の意見は曲げない。故に二人の意見は真正面から衝突し、合流し、混ざり合い、一つとなった。

「蓮子は物質界を、私は精神界を見る。私たちの視座が合わされば、きつと一つの世界が見えてくるはずよ」

蓮子は頷いた。

「その通りよメリー。それで、その……」

齒切れが悪くなって言い淀む蓮子。

「なーに？ どうしたの？」

「それがね、こうやって喫茶店で話をするのと、心霊スポットを巡るのとどっちが良いか
なつて。ほら、活動資金の兼ね合いで最近は遠出してなかったでしょ」

メリーは和かに微笑んだ。

「どちらも好きよ。蓮子が一緒ならね」

「それは有難い。宿代が一番重いからね。やっぱりルームシェアは偉大だわ」

「……ねえ、もしかして私の価値って宿代半額分なのかしら？」

「うーん、うん。予算的な価値としてはそう」

「ごめんなさい、今日はもう帰るわ」

「ちよ、待つてメリー、冗談よ。えと、事実ではあるけれど。その、貴女と一緒に私も
楽しいから。つまり……精神的な意味で」

「ふーん？」

席を立ちかけたメリーを慌てて引き留めた蓮子。メリーは呆れた様子でボヤキなが
ら席に戻った。

「貴女はもう少し人の心を見る事を心がけるべきよ。反省しなさい」

「そうね、冗談にしては面白くなかったし、事実としては余りに人の心が無かったわ。ご

めんなさい」

「うん。真面目で理性的な反省ね」

メリーとしてはもう少し感情的に反省して欲しかったなあというのが本音であったが、理知的に問題点を洗い直して謝罪する蓮子の姿勢は極めて真摯で、そして無機質だった。

「まるでオートマタみたい」

「メリーさん、その、私もう謝った」

「うるさい」

「ひい……ごめんなさいってばあ」

メリーさんは、怒らせると怖かった。

Talk 5

「秋めいてきたわね」

蓮子は、喫茶店の扉を開けて帽子を脱ぐ。室外と室内の空調による寒暖差は失われつつあった。メリーは一足先に普段の席に着き、ブレンドのコーヒーを注文して寛ぐ。店内に差し込む光は柔らかく暖かで、微かに肌寒く感じる空調と相俟って心地良い具合だった。

「ほら、蓮子こつち」

「はいはい、今行きますとも」

二人はゆっくり一息つき、頬杖を突いて窓の外を眺める。何処からともなく漂うコーヒーの香りが、蓮子を上機嫌にさせた。彼女は一仕事終えて羽を伸ばすかのように、背もたれに寄りかかって身体を伸ばす。

「夏を越えたご褒美みたいな季節ね」

くオータム・ゴー・デイズく

「今年の紅葉はどうなるかしら。去年は色鮮やかで素敵だったわ。今度、蓮子も一緒に観に行かない？」

「あく良いね。秋って感じ。でも、紅葉を観たいだけなら遠出しなくても、ほら」

蓮子は喫茶店前の街路樹を指差した。イチョウである。秋が深まれば、店内から自然と紅葉も見えるようになると彼女は言う。

「観光地でお上りさんみたいに見上げる紅葉よりも、馴染みの喫茶店でコーヒー片手に眺められる紅葉の方が、私は好きよ」

「それは蓮子がコーヒーを好きだからでしょ」

「うん、否定はしない」

注文していたブレンドコーヒーが二人の元に届いた。蓮子はコーヒーを運んできた店員に、追加でホットケーキを注文する。コーヒーの心地良い香りに当てられて、甘味が欲しくなったのだ。

「でも、喫茶店の前にイチョウねえ……。银杏の匂いとか強烈でしょうに、大丈夫なのかしら」

「最近の银杏は無臭だから大丈夫よ。イチョウは火災に強いし、剪定も容易で紅葉も綺麗。だから、街路樹として広く利用されていた。昔は银杏の悪臭が酷いから実をつけないう雄株を植えたりしてたけど、今や遺伝子編集技術の発展でその必要も無くなったって

「訳」

「悪臭のしない銀杏、美しい紅葉のイチヨウが全国に普及するなら、素敵な技術の使い方だと思おうわ」

蓮子は指を立てて左右に振る。浮かべられた微笑みは、悪戯げな少女のものだ。

「遺伝子編集で無臭の銀杏を作るのと、全国のイチヨウを植え替えるのは別種の問題よ。

今時、片田舎や地方の街路樹を悪臭や銀杏の為だけに植え替えたりすると思う?」

「わあ、夢の無い話」

「夢はある。それが世界に行き届くかは——」

「別種の問題、でしょ?」

「その通り」

蓮子は、運ばれてきたホットケーキにフォークを突き刺した。ホットケーキに載せられたバターの風味と、蜂蜜の甘い香りが漂う。

「美味しそう。私も注文しようかしら」

「スイーツは人生を豊かにしてくれる。甘味に美食、それで人生の半分は解決したも同然よ。もう半分は睡眠! 毎日、半日は寝たい気分だわ」

「けれど、過ぎれば水さえ毒になる。蓮子、最近寝坊が多いでしょ。それに、なんだか太り気味じゃない?」

「メリーったら酷い。女の子に太り気味なんてタブーよ」

「タブーは破る為にある、なんて、常日頃から吹聴してるのは誰だったかしら？」

「それはサークル活動での話よ。食欲の秋、人がそう言う季節に節食だなんて馬鹿らしいわ」

ホットケーキを頬張り、満足げに咀嚼してみせる蓮子。メリーは呆れ顔をして甘い香りを嗅ぎ、ふと想起する。

「金木犀……秋の甘い香りね」

「あはは、ホットケーキから金木犀だなんて、メリーってば連想力豊かだね」

「入り組んだ仄暗い路地を行く時に、香ってくる甘い匂いよ」

「金木犀は日陰を好むからね。日に当たると葉焼けして、真っ暗だと花付きが悪くなる。明暗の境界を好む花よ」

蓮子は、メリーを見て固唾を呑む。彼女は、差し込む光と日陰の境目に手を差し伸ばして金木犀の花を取り出していた。

「花は橙色をしてるわ。そう、それ。高さは精々4〜5m程だから、生物学上では亜高木の区分に入る常緑広葉樹よ。花言葉は——真実」

メリーは手に取ったそれを卓上に置く。二人の席には、金木犀の香りが漂い始めていた。

「次のサークル活動で、月の桂でも見に行きましようか？」

底知れない瞳をして、傾いた日と日陰の狭間に座るメリーを見て、蓮子は頭を掻く。これだから彼女は時々おつかないのだと。

「メリー、怖いからそういうの止めて頂戴。私、貴女が本当に同じ人間なのか分からなくなっちゃう」

「蓮子が暴くべき未知の一つに私を追加しないといけないわね」

「じゃあ、今後もしっかりこんな風に——対話が続けるべきね。魔術師メリーさん」

「あら、他人行儀」

クスクスと、二人して笑って空気が緩む。

「さて、次の目標も決まった事だし、メリーも何か頼まないの？ 私のオススメは日替わりパフェよ」

「へえ、本気で見に行くつもりなの？」

「当然。花が咲くのは秋なんだから、寧ろ今しかないでしょ」

月に生える伝説の桂の木。きつとさぞかし美しいに違いない。そう蓮子は楽しげだ。「で、どうやって見に行くつもり？」

「それは、これから考えるよ。幸い時間はある。こう言う難題を解決するには万物を関連付ける三次元的な思考が必要で、さて……うーん……」

蓮子は、コーヒカップを口に運んで苦々しい表情を浮かべる。

「さっぱり分かんない」

「それは残念」

「諦めてお月見にしない？」

「あら、スケールダウンしたわね」

「ダメかな？」

機嫌を伺うように問う蓮子を見て、メリーは微笑む。

「構わないわ。でも、月見団子は蓮子の奢りよね？」

「花より団子かあ……」

Talk 6

「私としては、憧れはするんだけどね」

蓮子は、コーヒーカップに口を付ける。彼女は、馴染みの喫茶店で窓際の席に腰掛けて寛いでいた。

「スケールが違い過ぎて、ピンと来ないというか、実感が湧かないんだよね」

困ったように頭を掻きつつ、蓮子は空を見上げて言う。

「宇宙という構造の広大さが」

くコズミック・ワールドく

「まず、私たちは太陽系第三惑星に住んでる。で、太陽系は天の川銀河に属してる。天の川銀河は局所銀河群の中にあつて、局所銀河群はおとめ座超銀河団の中にある訳で」

蓮子は、指折りしながら言葉を連ねる。一方メリーは、ブレンドコーヒーに口を付けていた。それは、店主が選んだコーヒー豆を中挽きしたものだ。深煎り、中煎り、浅煎りしたそれぞれを2対2対6でブレンドしたそれは、やや主張の強い酸味と仄かな苦味

が同居していて、コーヒーの豊かな風味が楽しめる。

「天の川銀河には2000億個ぐらい恒星がある。そして、局所銀河群には天の川銀河を含めて50個ぐらい銀河がある」

「想像もできないわね」

「おとめ座超銀河団は、そんな銀河群や銀河団が100個ぐらい集まっている」

大雑把にイメージすると、おとめ座超銀河団には2000億×50×100個の恒星があつて、そんな超銀河団が無数に集まって板状や紐状の構造になると蓮子は言う。

「それが、銀河ウォールや銀河フィラメントよ。それで、こうした板や紐状構造物が更に無数に集まって泡のような形になっている。これが、有名な宇宙の泡構造よ。で、そんな泡がいっぱいあるのよね。まあ、ここで重要なのは細かい数字の正確性じゃなくて、宇宙は広いって事。そりゃあ、宇宙人ぐらい居るわよね」

メリーは呆れ顔だ。

「あのねえ、蓮子。確かに宇宙は広いし、だからこそ宇宙人はきつと居る。でもね、宇宙人の存在を保証する宇宙の広大さこそが、私たちと宇宙人の遭遇不可能性を突き付けているんでしょ?」

「その通りだよメリー。実に……皮肉な事だよね」

コーヒーに口をつけて、たつぷりと沈黙してから蓮子は微笑んだ。

「宇宙人は居る。けれど、決して出会うことはない」

「それと、蓮子みたいな科学者とは違って、普通の人々が使う宇宙人という言葉は、妖怪と同じ意味合いよ」

メリーは付け加えて、過去の人々の世界観について語った。

「かつて人々は、未知の領域に取り囲まれて生きていた。既知なのは自宅や村の中ぐらいで、村外れの橋の向こう側や、猟師達の行く山の先には未知の世界があった」

「未開の世界ね」

「そうした世界に生きる人々にとって、妖怪とは未知の世界からやって来る何かだった。けれど、今や人々は未知を駆逐した。だから、未知の世界が橋や山の向こう側から宇宙になっただけの話なのよ」

人間の性根は変わらない。何千年経とうとも私たちは妖怪を恐れるだろうとメリーは断言した。

「人類が発展して恒星間航行やワープが可能になって、銀河を股にかけて沢山の宇宙人や宇宙生物と大航海時代よろしく大遭遇するとして……」

メリーは、深く背もたれに身を横たえる。秋の暖かな日差しが差し込んでいて、道ゆく人々の装いは冬に備えるかのように厚くなり始めていた。

「きつと、外銀河フライメント人とかを怖がったりするんじゃないかしら？」

「未来の怪談か。うくん、興味をそそられるわね。恐怖！ 超空洞からの物体X！ みたいなの？」

「それは……B級映画のノリね」

困ったように笑顔を見せるメリー。しかし、蓮子は楽しげで饒舌だ。

「この宇宙の広大さを思うと、清々しい気分になるんだよね。私みたいなちっぽけで刹那的な存在が、永遠であり広大無辺な領域を思うことができるだなんて、なんて、幻想的な空想なんだろうってね」

対するメリーは、胸に手を当てて吐露して見せた。

「私は心を思うと、清々しい気持ちになるわ。喜怒哀楽、全ては言葉で言い表す事ができないものだから」

疑問符を浮かべる蓮子に、メリーは分かりやすく言い直す。

「言葉は究極的には比喻に過ぎないのよ。近似はしても、その心象を完全に伝える事はできない」

「私の悲しみと、メリーの悲しみが、少しずつ違う悲しみでも、悲しみという単語で表す事しかできないように？」

「そう。例えばどれだけ詳細に言葉を重ねて伝えても、何処かで意味の損失や誤謬が発生する」

しかし、メリーはその言葉とは裏腹に笑顔だ。

「私はそれが嬉しい」

断言したメリーは、コーヒーを一口飲んでから息をゆつくりと吐き、目を閉じて喫茶店内の香りを楽しんでから、首を傾けて秋空を見た。絵に描いたような鱗雲で、遠くからは藁を焼く匂いの幻覚さえしてきそうさだ。

「私の感情は、どれだけ言葉を尽くしても、完全には伝えられない。それはつまり、私の感情は、完全に私のものだと言うことよ。この幸せも、この喜びも、悲しみさえ、一つ残らず私のものよ。だって誰にも伝えられずに、手放せないものなんだもの」

メリーは嘸み締めるように自らの心を味わい、それを楽しんだ。

「言葉を尽くしても伝わらないもの。だからこそ、口を閉ざして笑顔を浮かべれば、それだけでそれは深秘になるのよ」

上機嫌な微笑みを浮かべたメリーを見て、蓮子は背筋がぞくりとした。メリーから感情が一切読み取れなかったからだ。その微笑みの裏側は、全くもつての未知だった。

未知の世界からやって来る何か

人はそれを妖怪と呼ぶ。

ならば沈黙と笑顔一つで未知となる、人間の感情というものは、妖怪が産まれ出る最も身近な領域なのだろう。蓮子はそう、メリーの微笑みから悟った。

「ねえメリー、その妖怪が飛び出してきそうな、胡散臭い微笑みをやめて頂戴。ほら、怖いから」

「あら、怖がらせてしまったかしら。ごめんなさいね」

舌を出して悪戯娘のように謝るメリーを見て、蓮子は羨ましいと思った。メリーは、個人的な感情を自らのものとして楽しみ、他者とのコミュニケーションの不完全さを寧ろ、自己の確立の為に必須な要素の一つとして見做している。

「メリーにとつては、孤独もまた他者との関係性の一つのね」

メリーは、他者との繋がりの中で自らを形造るのではなく、他者との異なりの中に自らを見出していた。決して分かり合えない心、比喻に過ぎない言葉、共有できない能力。私と貴方は違う――

「メリーは、自分だけの世界を持つてる」

「急にどうしたの蓮子？」

「私も、メリーみたいに自分だけの世界を作ってみようかなって思ってる」

「いやいや、蓮子だってもう持つてるでしょ」

大人なら誰だって、自分だけの世界を持っている。他人と分かり合えない経験を積ん

で、自分という者を分かっていく。それが人間だとメリーは微笑んだ。胡散臭い笑みだ。

「みんなが自分だけの世界を持つてて、出会いはそれを重ね合わせるの。世界と世界が出会う時の美しさを蓮子は知ってる？」

「いやあ、見た事ないけど」

「あら、酷い」

メリーは両手を広げて自慢げな表情をする。

「ほら、ここが秘封倶楽部の世界なのに」